

語引用符の後ろに助詞や助動詞が続くときは、一マスあける。

(例) テンジノ □ コトヲ □ エイゴデワ □ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ □ ト □ イウ ⠠⠠  
(点字のことを英語では braille という。)

1 語中にひと続きに書き表す英単語などが含まれている場合は、外国語引用符の前の仮名とは続け、後ろの仮名との間には第1つなぎ符 (⠠) をはさんで続けて書くことを原則とする。

(例) ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ ケン (gift 券) ボン ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ (凡 play)

外国語引用符と外字符とを混同して用いないように十分注意が必要である。例えば、同じ「WHO」であっても、世界保健機関の略称なら外字符を前置して書き表し、関係代名詞なら外国語引用符を用いることになる。

### (13) ホームページ・メールアドレスなど

ホームページやEメールのアドレス、SNS のアカウントなどを書き表す場合は、その前後をアドレス囲み符号 (⠠⠠⠠⠠ ~ ⠠⠠⠠⠠) で囲む。

## 第2節 分かち書きの学習

漢字仮名交じり文では、漢字によって語の区切り目や意味のまとまりが比較的分かりやすくなっているため、分かち書きをしていない。これに対して、仮名で書かれている幼児用の本や、漢字があまり使われていない小学校低学年の検定教科用図書などのような文章は、文を読みやすくするために、語のひとまとまりごとに区切って、分かち書きされている。点字も仮名文字体系の表音文字であるため、語の区切り目を明らかにするために分かち書きをする必要がある。

点字の分かち書きについては、『日本点字表記法』において、次の二つの原則が記されている。

第1原則は、文節で区切るもので、「文節分かち書き」と呼ばれている。文節として区切る箇所は、語句の間に「ね」や「さ」「よ」の助詞を入れて文の意味が変わらないところと考えてよい。なお、指導においては、「文節」は中学校1年生の国語で学習するものであることに留意しておく必要がある。

第2原則は「切れ続き」である。第1原則の「文節分かち書き」で区切っても、一つの長い複合語や固有名詞などは、内部に独立性の強い意味のまとまりが複数あり、それを素早く的確に判断することは難しい。そこで、読みやすく、書きやすく、分かりやすい点字表記となるよう、自立語内部にある独立性の強い意味のまとまり（区切って書き表した方が意味の理解を助ける構成要素）で区切ることにしている。これが第2原則の「切れ続き」である。

なお、分かち書きにより区切って書く際、間（マス）をあけた部分のことを「マスあけ」と呼んでいる。

## 1 分かち書き

ここでは、文節で区切る分かち書きの第1原則について述べる。

点字の分かち書きは文節分かち書きであるので、原則的には、自立語はその前をあけて書き、付属語（助詞・助動詞）は自立語に続けて書く。正確な分かち書きをするには、自立語なのか付属語なのか見分けなければならないが、間に助詞の「ね」「さ」「よ」を入れて文の意味が変わらなければ、そこで区切ってほとんど問題はない。

しかし、自立語である形式名詞や補助動詞・補助形容詞を前の語に続けてしまったり、付属語の「そうだ」「ようだ」などの助動詞でマスあけしてしまったりすることもあるので、繰り返し指導する。

### (1) 自立語

単独で文節を作ることができる自立語（名詞・動詞・形容詞など）は、前を区切って書き表す。

（例）ガッコエ □ イク ♪♪ （学校へ行く。）

フユワ □ サムイ ♪♪ （冬は寒い。）

「こう」「そう」「ああ」「どう」といった副詞や、「この」「その」「あの」「どの」といった連体詞も自立語なので、前を区切って書く。しかし、これらの語が後ろに続く語と結び付いてひとまとまりの意味をもつ複合語になった場合、例えば、「先日」の意味の「このあいだ」、「なぜ」の意味の「どうして」、「さらに」の意味の「そのうえ」のような場合には、続けて書き表す。このように意味の違いによって書き分ける語についても丁寧に

指導していく。

(例) コノアイダ □ カレニ □ アッタヨ ☺☺

(この間〔先日〕彼に会ったよ。)

コノ □ アイダニ □ ハサンデ □ オイタヨ ☺☺

(この間に挟んでおいたよ。)

ドーシテ □ コタエナイノ ☺☺ (どうして〔なぜ〕答えないの?)

ドー □ シタラ □ コタエルノ ☺☺ (どうしたら答えるの?)

カゼガ □ ツヨマッテ □ キタ ☺☺ □ □ ソノウエ ☺☺ アメモ □ フリダシタ ☺☺

(風が強まってきた。そのうえ〔さらに〕、雨も降りだした。)

テイシュツブツワ □ ソノ □ ウエニ □ オイテ □ クダサイ ☺☺

(提出物はその上に置いて下さい。)

## (2) 助動詞・助詞

助動詞・助詞は付属語であり、前の語に続ける。

(例) キノーホド □ サムク □ ナイ ☺☺ (昨日ほど寒くない。)

コーエンマデワ □ トオク □ ナイ ☺☺ (公園までは遠くない。)

ソノ □ ホンバカリ □ ヨマナイ ☺☺ (その本ばかり読まない。)

モー □ タベナイ ☺☺ (もう食べない。)

## (3) 形式名詞

形式名詞は自立語であり、前を区切って書き表す。形式名詞は「こと」「とき」「ところ」「ため」「たび(度)」「てん(点)」「とおり」「はず」「ほか」「ほう(方)」「まま」「もの」「ゆえ」「わけ」などのように短い語が多く、ともすると前の語に続けられやすいので注意する。

ただし、「ニンゲンダモノ(人間だもの)」の「もの」や「ミッツホド(三つほど)」の「ほど」は助詞であり、形式名詞ではないので続けて書く。

(例) ヨム □ トキニ (読むときに)

カク □ コトヲ (書くことを)

コンナ □ フーニ (こんなふうに)

オクレタ □ タメ (遅れたため)

「ドンナ □ モンダ(どんなもんだ)」のように、形式名詞が会話などで音韻変化を起こした場合も前を区切って書く。

(例) ハヤイ □ トコ (早いとこ)

イヤナ □ コッタ (いやなこった)

モー□チョットン□トコジャ（もうちよつとんどこじゃ）

#### (4) 補助用言

補助用言（補助動詞・補助形容詞）は、自立語であり、動詞や形容詞と同様に前を区切って書き表す。指導に当たっては、前の語に続けて書かれやすい傾向があることに留意しておく。

- (例) ハナガ□サイテ□イル☹☹（花が咲いている。）  
 アメガ□フッテ□クル☹☹（雨が降ってくる。）  
 ハナシヲ□キイテ□ミヨー☹☹（話を聞いてみよう。）  
 ホンヲ□ヨンデ□モラウ☹☹（本を読んでもらう。）  
 ワガハイワ□ネコデ□アル☹☹（吾輩は猫である。）  
 キョーワ□サムク□ナイ☹☹（今日は寒くない。）  
 オハヨー□ゴザイマス☹☹（おはようございます。）  
 ゴアンナイ□モーシアゲル☹☹（ご案内申し上げます。）

「寒く□ない」「遠く□ない」の「ない」は形容詞なので、マスあけをする。これに対し、「読まない」「食べない」などの「ない」は、打ち消しの助動詞であるので続けて書く。

「ない」が、形容詞であるか助動詞であるかについては、次のようにして見分けることができる。

- a 形容詞の「ない」は、「寒くはない」「遠くもない」のように「は」や「も」をはさむことができる。
- b 助動詞の「ない」は、「読まぬ」「食べぬ」のように「ない」を「ぬ」に言い換えることができる。

ただし、「あどけない」「おとなげない」「変わらない」「心ない」「間違えない」「みっともない」「もったいない」「素っ気ない」などは、区切ると一語としての意味の理解を妨げる恐れがあるので、マスあけをせずに続けて書き表す。

また、「よく□なる」や「小さく□なる」などのような「なる」は補助動詞であるので、マスあけをするが、物や人などが「なくなる」の場合は、消滅を表す複合語であるので続けて書き表す。「なくなる」がどんな意味で使われているか考えて、正しい点字表記ができるように留意する。

(例) カレワ □ ヒトリ □ サビシク □ ナクナッタ ☹☹

(彼は一人寂しく亡くなった。)

キミガ □ キテ □ クレタノデ □ サビシク □ ナク □ ナッタ ☹☹

(君が来てくれたので寂しくなくなった。)

ダイオンキョーノ □ セイデ ☹☹ □ パーティーヲ □

タノシムドコロデワ □ ナク □ ナッタ ☹☹

(大音響のせいで、パーティーを楽しむどころではなくなった。)

ナクシタ □ サイフト □ トモニ □ オカネモ □ ナクナッタ ☹☹

(なくした財布とともにお金も無くなった。)

ユーナギデ □ カゼガ □ スッカリ □ ナクナッタ ☹☹

(夕風で風がすっかり無くなった。)

補助動詞が前の語と結び付いて音韻変化を起こした場合や、補助動詞の一部が省略されて前の語と結びついた場合は、マスあけせずに続けて書く。

(例) モラットク (もらっとく ← もらって □ おく)

ヤメトケ (やめとけ ← やめて □ おけ)

カイテル (書いてる ← 書いて □ いる)

ハシツテク (走ってく ← 走って □ いく)

イッテラッシャイ (行ってらっしゃい ← 行って □ いらっしゃい)

## 2 自立語内部の切れ続き

ここからは、自立語内部にある独立性の強い意味のまとまり（区切って書き表した方が意味の理解を助ける構成要素）で区切る、分かち書きの第2の原則、「切れ続き」について述べる。

自立語であっても長い複合語などの場合は、自立語内部も区切ってある方が読みやすくなる。そこで、和語・漢語・外来語を通して、3拍以上の独立性の強い意味のまとまりが二つ以上あればその境目で句切り、2拍以下の意味のまとまりはそのどちらかに続けて書き表すことを原則としている。

なお、1拍と数えるものは、点字では、一マスで表記する五十音、二マスで表記する濁音・拗音・特殊音のほかに、撥音符、促音符、長音符をも含めることになっている。

(1) ひと続きに書き表す自立語の例

ア 区切ると意味の理解を妨げる短い複合語や略語

(例) ツナヒキ (綱引き)    ゼイコミ (税込み)    ガクワリ (学割)  
       コクレン (国連)        マスコミ        パソコン

イ 内部に助詞などを含んでいても1語として熟している短い複合語

(例) オンナノコ (女の子)        カミノケ (髪の毛)  
       ツカノマ (東の間)            ミノウエ (身の上)  
       ヨノナカ (世の中)

ウ 接頭語や接尾語などを含む語

(例) マヨナカ (真夜中)        コドモたち (子どもたち)  
       コーカテキ (効果的)        ダイカンゲイ (大歓迎)  
       ヒニンジョー (非人情)        ゼンセカイ (全世界)  
       チョートツキュー (超特急)        ヒホケンシャショー (被保険者証)  
       モノカルチャー    パートナーシップ    ユニセックス

エ 区切ると理解を妨げる動植物名や理化学用語

(例) タチウオ (太刀魚)        ミズバショウ (水芭蕉)  
       カモナス (加茂茄子)        ポリエチレン        ムカシトンボ

オ 複合動詞や複合形容詞 (動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に接続する動詞や形容詞)

(例) アルキツツケル (歩き続ける)        カタリツクス (語り尽くす)  
       シズカスギル (静かすぎる)        アツクルシイ (暑苦しい)

カ サ行変格活用の動詞のうち、次のような語

a 「する」との結合により、促音化・撥音化などの音韻変化を起こしたり、連濁を起こしたりしたもの

(例) タッスル (達する)        セッスル (接する)  
       オモンズル (重んずる)        サキンズル (先んずる)

- オーズル（応ずる）      メイズル（命ずる）      シンズル（信ずる）
- b 独立性の弱い1字漢語などに「する」がついて一体化したもの  
（例）カンスル（関する）      ヒスル（比する）      ユースル（有する）  
クミスル（与する）      ロースル（労する）
- c サ行変格活用のほかに五段等の活用を持つもの  
（例）ガイシナイ（害しない／サ変）      ガイサナイ（害さない／五段）  
アイスル（愛する）      シスル（死する）      ゴクスル（属する）  
カンズル（感ずる）      エンズル（演ずる）
- キ 2語の連合によって連濁を生じた場合  
（例）カブシキガイシャ（株式会社）      コハルビヨリ（小春日和）  
メザマシドケイ（目覚まし時計）      ユノミヂャワン（湯飲み茶碗）

## (2) 区切って書き表す自立語の例

- ア 3拍以上の独立性の強い意味のまとまりが二つ以上ある複合名詞  
（例）サクラ□ナミキ（桜並木）      マツタケ□ゴハン（松茸ご飯）  
コクゴ□ジテン（国語辞典）      ニューガク□シケン（入学試験）  
ソフト□コンタクト□レンズ      枕□カバー（枕カバー）  
テンジ□シュッパンジョ（点字出版社）
- イ 2拍以下でも独立性が強く、語の意味の理解を助けるような複合名詞  
（例）トシ□コッカ（都市国家）      シカ□イシ（歯科医師）  
コートツ□ジコ（交通事故）      ミンシュ□シュギ（民主主義）  
ネン□ヘイキン（年平均）      ケン□タイイクカン（県体育館）  
クリスマス□イブ      マス□コミュニケーション
- ウ 接頭語など独立性の弱い要素であっても、意味の理解を助ける場合や、発音上の切れ目がある場合  
（例）マル□⠠⠠⠠ニチ（丸一日）      マン□⠠⠠⠠サイ（満三歳）  
チョー□ゲンジツテキ（超現実的）  
ヒ□ジンドーテキ（非人道的）  
コクゴ⠠□スーガク□トートー（国語、数学等々）

◇「等（とう）」などは、意味の理解を容易にするため区切って書くが、「など」は助詞であるので区切らず続けて書く。

エ 語頭にある接頭語の意味がマスあけを含む複合語全体にかかる場合

(例) ダイ□ドボク□ジギョー（大土木事業）  
 シン□コクサイ□クーコー（新国際空港）  
 メイ□ジム□ソーチャー（名事務総長）

オ 名詞や副詞に続くサ行変格活用の複合動詞

(例) セイカツ□スル（生活する）  
 ベンキョー□シ□ウンドー□スル（勉強し運動する）  
 ソン□スル（損する）      ハリ□スル（鍼する）  
 グタイカ□スル（具体化する）      イライラ□スル（いらいらする）  
 シッカリ□スル（しっかりする）  
 イッチ□ダンケツ□スル（一致団結する）  
 ジガ□ジサン□スル（自画自賛する）

◇一般にサ行変格活用の複合動詞は、「する」の前を区切って書き表すが、続けて書く場合もあるので、混同しないよう注意する。

カ 年月日などはその段階ごとに句切り、また、そのあとに続く語も意味を明確にする必要がある場合

(例) ㊦㊦㊦㊦㊦ネン□㊦㊦㊦㊦㊦ガツ□ツイタチ(1890年11月1日)  
 ゴゼン□㊦㊦㊦ジ□㊦㊦㊦㊦㊦ブン□㊦㊦㊦㊦㊦ビョー（午前1時23分56秒）  
 ㊦㊦㊦㊦㊦ガツ□㊦㊦㊦㊦㊦ニチ□㊦㊦㊦㊦㊦ジ□㊦㊦㊦㊦㊦フン□ハツ  
 （12月31日18時19分発）  
 ㊦㊦㊦メートル□㊦㊦㊦㊦㊦センチ□キョー（1メートル60センチ強）  
 ㊦㊦㊦㊦㊦キログラム□ゲン（15キログラム減）

キ 二つ以上の独立性の強い意味のまとまりからなる繰り返し言葉

(例) ムカシ□ムカシ(昔々)      トオイ□トオイ（遠い遠い）  
 アメ□アメ□フレ□フレ（雨雨降れ降れ）  
 ヤッテ□キタ□キタ（やって来た来た）



パチリ □ パチリ □ ウツス (ぱちりぱちり写す)

### 3 固有名詞内部の切れ続き

固有名詞内部の切れ続きは、原則として自立語内部の切れ続きと同じであるが、次のような点に注意する。

#### (1) 人名の名字と名前

人名の名字と名前の間は区切って書き表す。外国人名のうち、2拍以下の名字・名前も区切って書き表すことを原則とするが、必要に応じて、続けるか、つなぎ符類をはさんで続けて書き表してもよい。

(例) ナツメ □ ソーセキ (夏目漱石)      リ □ タイハク (李太白)  
レオナルド □ ダ □ ビンチ      レオナルド □ ダビンチ  
レオナルド □ ダ ∷ ビンチ (レオナルド・ダ・ビンチ)  
トホ (杜甫)      シバ □ セン [シバセン] (司馬遷)

#### (2) 人名の後ろに敬称・官位・尊称などが続く場合

人名の後ろに敬称・官位などが続く場合、3拍以上の独立性の強い意味のまとまりを持っているときや、2拍以下でも独立性が強く意味の理解を助ける場合は区切って書き表す。

(例) フクザワ □ ユキチ □ センセイ (福沢諭吉先生)  
カスガノ □ ツボネ (春日局)  
テラダ □トラヒコ □ チョ (寺田寅彦著)  
タケヒサ □ ユメジ □ エ (竹久夢二絵)

「さん」「様」「君」「殿」「氏」「氏(うじ)」については、人名を浮き出たせるために、人名との間を区切って書き表すことを原則とするが、普通名詞などの後ろや、愛称・短縮形・一族を表す氏名(うじな)などは続けて書き表す。

(例) スズキ □ サマ (鈴木様)      イシカワ □ クラジ □ シ (石川倉次氏)  
トチジドノ (都知事殿)      シマ □ シャチャーサン (島社長さん)  
オツキサマ (お月さま)      ウサギサン (うさぎさん)  
ハナコチャン (花子ちゃん)      フジワラシ (藤原氏)

### (3) 地名など

地名（国名や自然名を含む）や組織または団体名・会社名などは、3拍以上の独立性の強い意味のまとまりごとに区切る。2拍以下の意味のまとまりでも、独立性が強く意味の理解を助ける場合には、区切って書き表してもよい。

- (例) ヤマト□コオリヤマシ（大和郡山市）  
 ニホン□テンジ□イインカイ（日本点字委員会）  
 ペンシルベニアシュー（ペンシルベニア州）  
 キノカワ（紀ノ川）      キタキューシューシ（北九州市）  
 ホッカイドーチョー（北海道庁）      エッフエルトー（エッフエル塔）  
 タイ□オーコク（タイ王国）      ノト□ハントー（能登半島）  
 ミノ□カモシ（美濃加茂市）      ムサシノ□クニ（武蔵野国）  
 ホッカイドー□チジ（北海道知事）      ツ□シチョー（津市長）  
 キタ□ホケンジョ（北保健所）      コーヤ□シタ（高野下〈駅名〉）

## 第3節 表記符号の用法などの学習

### 1 句読法の用法

墨字の句読法は、表記する側の判断に委ねられている部分があり、表記において必ずしも一定にならない場合があるが、文章の内容を正確に読み取るうえで重要な位置を占めるものとなっている。

これは点字においても同様である。点字の場合、マスあけで語句の区切り目を表すことができるが、正確な文章表現や内容の正確な読み取りのために、適切に句読符を用いる必要がある。点字の句読法は基本的に墨字と対応するが、点字の触読の特性を考慮し墨字との対応を図ることが大切である。

#### (1) 句点

文の終わりには句点（⋮）を続けて書き、次の文との間を二マスあける。句点の後にカギ類やカッコ類の閉じ符号がくる場合には、句点と閉じ符号との間は続ける。

- (例) ウシロカラ□⋮ オーイ⋮⋮ ト□ヨバレテ⋮□